



ニコラ・アルトシュテット (2023.2.21) © ヒダキトモコ

## ニコラ・アルトシュテット (チェロ) プロジェクト

イリア・グリンゴルツ、毛利文香 (ヴァイオリン) / 原 麻理子 (ヴィオラ)  
アンナ=レナ・エルベルト (ソプラノ) / ヨーナス・アホネン (ピアノ)

ボーダーを超える音楽 — 精鋭が集結する渾身のプロジェクト 長木誠司

[Interview] ニコラ・アルトシュテット

## トリオ・ヴァンダラー

さすらいの探求者がたどり着く「フランスの精髓」 小川敦生

[Schedule 2026.5～8]

[Information]

2026/2027シーズン主催公演ラインナップ発表

本堂竣哉 (ピアノ) × ベーゼンドルファー 若き異才の挑戦!

ランチタイムコンサート Vol.140 近衛剛大 (ヴィオラ)

久元祐子 ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全曲演奏会 vol.4

TOPPAN HALL

PRESS

25<sup>th</sup>  
TOPPAN HALL  
since 2000

# Nicolas Altstaedt Project



## ボーダーを超える 精鋭が集結する 渾身のプロジェクト

2023年2月にTOPPANホールに現れたニコラ・アルトシュテットによる無伴奏の一夜はまさに鮮烈だった。前半をバッハの、後半をコダーイの無伴奏作品を締めめに置くにしても、それにつながっていく選曲はそれぞれ、前半がデュティユー、後半がヴィトマンという「現代曲」であり、またデュティユーからバッハに至る途上にはガブリエッリの小曲が何気なく置かれている。これは続くバッハ作品（《組曲第5番》）が指定しているのと同じ、今日では変則的な調弦によるものだ（スコルダトゥーラと呼ばれる）。ヴィトマンの曲は、次のコダーイ作品と同じ調弦。バッハからコダーイまでの200年ほどの歴史的な時間が、デュティユーからヴィトマンまでの40年ほどに凝縮されつつも、現代が過去への架橋を伴って（介して）演奏される。なんと巧緻なプログラムなのだろう。また、これらを演奏するアルトシュテットの絶妙なポウイングと表現力の高度なこと。それも、単に技術を披露するだけではない（それも相当なものだが）、どこか憑かれたような音楽の持つ凝縮力。

アルトシュテットが生まれたのは1982年ドイツのハイデルベルク。両親はドイツ系フランス人だ。そもそもハイブリッドな出自と言える。そして、学んだのはデトモルトのあと、東西ドイツ統一後の、もと東ベルリンのハンス・アイスラー音楽学校（現在、彼はこの母校で指導にもあたっている）である。ちょうど東西の壁崩壊後、この街が昔日の繁栄を思い出しながら新たに国際化し、文化的にハイブリッドになっていくさなかである。師のボリス・ペルガメンシコフによる薫陶も大きかったろう。この師はチェロ演奏だけでなく、文学や映画への興味もアルトシュテットに目覚めさせた。チェロの演奏以上のことをこのひとはこの街で学び、体験したのである。「壁のなさ」は、まさにアルトシュテットの代名詞になっていく。それは、バロックから現代にまで、そしてクラシックからポップまでに及ぶ、ボーダーのない音楽への取り組みにもうかがわれるし（最新のアルバム「ブラックパース」のタイトルは、自由を求める黒人女性を暗示した、ジョン・レノンとポール・マッカートニーの曲から採られており、カバー曲も同アルバムに収録されている）、そのボーダーのなさ、あるいは自由への志向性を、よくありがちなキャッチーな草草としてではなく、歴史の深みと流れから意識的に捉え返す術を熟知しながら前面に出していることから読み取れよう。同じようなことは、彼がこれまで共演してきたファジル・サイやテオドール・クルレンツィ



Ilya Gringolts



Fumika Mohri



Mariko Hara



Anna-Lena Elbert



Joonas Ahonen

### Artist Interview

## ニコラ・アルトシュテット

—今回共演するイリア・グリンゴルツさんとは、とても仲が良い印象を受けますし、ヨナス・アホネンさんとはこれまでも共演経験がありますよね。彼らの魅力についてお聞かせいただけますか？

イリアとは20年以上の付き合いになります。彼はほぼ毎夏、ロッケンハウスでの私の音楽祭に参加してくれていますし、私自身も彼が芸術監督を務める音楽祭に出演してきました。「既成概念にとらわれない」思考を持つヴァイオリニストで、並外れた知性と多彩な表現でコンサートに新しい風を吹き込んでいます。すべての音楽家にとってのロールモデルといえる存在でしょう。私たちは似たようなビジョンや考えを共有しており、日常でも舞台の上でも刺激を与えてくれる友人がいることは、とても喜ばしいことです。

ヨナスとは、これまでに一度、音楽祭でプリテンのソナタとシェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》を共演しました。2007年にヘルシンキで開催されたパウロ国際チェロ・コンクールに参加して以来、フィンランドは私の音楽人生の一部となっており、現在はタピオラ・シンフォニエッタのアーティスティック・パートナーも務めています。そこで再びヨナスと出会い、日本での公演に向けて準備を進めてきました。ヨナスは常に新しい音楽に囲まれて生活していて、そのことが主要レパートリーに対しても非常に新鮮なアプローチをもたらしています。これはとても重要なことです。過去の作曲家の思考は、現代のさまざまな作曲家と日常的に関わることでこそ、初めて本当に理解できるのだと思います。

2023年2月、鮮烈な無伴奏で聴衆を魅了したアルトシュテットに、今回のプロジェクトについてメール・インタビューしました。

—2日目のプログラムのコンセプト、聴きどころについてご紹介ください。

3つの作品に注目していただきたいと思います。

まず、私は2011年にニューヨークでバルトークの初期のピアノ五重奏曲に出会い、深く魅了されました。この作品は、当時彼が書いた別の作品よりも私的な演奏会で成功を収めたにもかかわらず、本人によって退けられてしまいました。その後、再び演奏されるようになったのは1960年代に入ってからで、私がこの作品に出会った当時から、まだ演奏会の定番曲とは言えない存在でした。これは、ひとつの時代の終焉と、ふたつの大戦や十二音技法といった新しい音楽体系を生んだ20世紀が交差する、非常に興味深い時期の音楽です。ブラームスのクラリネット五重奏曲と、シェーンベルクの《浄夜》は、それほど大きく時代が離れていません。バルトークの五重奏曲には、神秘性やチャルダッシュ、R. シュトラウス、マーラー、ドヴォルジャークの影響が色濃く感じられますが、私は《青ひげ公の城》の響きも聴こえてきます。この作品は私のお気に入りのひとつとなり、ロッケンハウス室内楽音楽祭のCDシリーズの最初の録音にすべきだと決めました。

次に、ショスタコーヴィチです。私が6歳のときに初めて出会った作曲家であり、それ以来ずっとその音楽語法は身近なものになっています。《ブロークの詩による7つの口マンズ》は晩年の室内楽の傑作であり、すべてが非常に独特です。アレクサンドル・ブロークによる神秘的な詩は象徴性に満ち、心に残る妖しさを帯びています。楽

器編成の独自性や、極限まで削ぎ落とされた厳選の音楽的構成要素は、この作品を聴くたびに存在に関わる深い体験へと誘います。

そして、ドヴォルジャークのピアノ三重奏曲第4番《ドゥムキー》です。この作品はピアノ三重奏曲のなかでも特に頻りに演奏される曲ですが、これほど誤解されている作品もないと感じています。これはドヴォルジャークの人生における核となる作品のひとつであり、ブラームスの影響下で書かれた交響曲第7番やピアノ三重奏曲第3番（ヘ短調 Op.65）のような対位法的書法から、スラヴの様式へと移行する重要な転換点に位置しています。この曲は、シュベルトが《冬の旅》の（辻音楽師）で描いたような、盲目のウクライナの吟遊詩人たちの物語を受け継いでいます。こうしたドゥムキーの歌い手たちは、後にスターリン体制下で粛清されてしまいました。《ドゥムキー》は、同時期に書かれた《レクイエム》Op.89と並ぶ、時代を先取りしていた名作なのです。

—最後に、今回の公演を心待ちにしている聴衆に向けてメッセージをお願いします。

日本は私の大好きな国のひとつです。文化も人も本当に大好きです。ここで演奏させてもらえるのは、本当に光栄なことです。TOPPANホールの音響は素晴らしいですし、日本の聴衆はクラシック音楽にとっても集中して聴いてくれるので、演奏していて本当に刺激になります。日本のみなさん、いつも私たちを温かく迎えてくださり、ありがとうございます。5月に私の大好きな音楽を聴いてもらえるのを、とても楽しみにしています。

## ト 長木誠司







スといった、現代最先端を走るクラシックの名士たち、そのとてつもない才能たちとも共通している。

2018年の日本デビュー自体も驚きだった。単身での来日ではなかった。従えてきたのは、オーストリアはアイゼンシュタットのエステルハーゼ宮を本拠にするハイドン・フィルハーモニー。この団体の芸術監督を、創設者のアダム・フィッシャーに替わって2015年から務めているのがアルトシュテットだ。ハイドンの後期交響曲を演奏するというのに、舞台上にはほんの少しの譜面台しか置かれていない。いわば最小限の人数での演奏。そして、「指揮者」としてのアルトシュテットは、股下の深いサルエルパンツ姿でかしまることなく、さながらラッパーのように登場し、チェロ協奏曲では弾き振りも披露した。オーケストラは取り立ててピリオド楽器を誇示するわけでもなく、現代楽器も取り混ぜた折衷型。でもアルトシュテットはピリオド弓で軽快に飛ばす。古楽並みのスピード感を、現代的な強弱のコントラストのなかで切れ味鋭く打ち出していく。そして、彼自身によるカデンツァには、ハイドン時代にはあり得ない倍音奏法や雑音奏法がふんだんに採り入れられていた。なにもものにも囚われていなさそうところが、まさに「今」の音楽状況を示している。

「囚われていない」という意味で印象的だった、というか驚かされたアルトシュテットの演奏は、ドイツ音楽評議会の主催する2005年のコンクールでの優勝後、デビュー盤としてリリースされた2007年のGENUIN盤（GEN87084）で、ベートーヴェンの第4番のチェロ・ソナタ、ウェーベルン、ストラヴィンスキー、そしてリグティの無伴奏ソナタなどと並んで収録されているバッハの《無伴奏チェロ組曲第5番》だ。TOPPANデビューでも演奏されたこの曲は、スコルダトゥーラともども彼のお気に入りなのであろうが、ガヴォット第2番と最後のジークで、なんと聴き慣れない第2声部が聴こえてくる。アルトシュテットは、この作品のリユート版である《組曲第3番》の低声部を加えて録音しているのである。彼はリユート版での和声感の豊かさをチェロ版でも活かしたかったようだが、予備知識なく聴くと、たぶん誰しも何ごとかと驚くであろう。多重録音で録られたものらしく、TOPPANでの実演ではさすがに聴くことはできなかったが、このような自由な演奏、作品との付き合い方のできる演奏家はこれまでいなかったタイプである。今回の2夜のプログラムは、曲目だけでも多彩で面白そうだが、それだけではない、なにかが起ころ、きつと。それを楽しみにながら待てよう。

（ちょうき・せいじ／音楽評論家）

## ニコラ・アルトシュテット プロジェクト

ニコラ・アルトシュテット(チェロ)   
イリア・グリンゴルト 、毛利文香  (ヴァイオリン)  
原 麻理子 (ヴィオラ)  / アンナ＝レナ・エルベルト (ソプラノ)   
ヨナス・アホネン (ピアノ) 






















## 第1夜—Duo

2026年5月26日(火) 19:00

ベートーヴェン: チェロ・ソナタ第1番 へ長調 Op.5-1  
コダーイ: ソナティナ  
ドビュッシー: チェロ・ソナタ  
バーバー: チェロ・ソナタ Op.6  
ブリテン: チェロ・ソナタ へ長調 Op.65  
6,500円 / U-25 3,000円 全席指定

## 第2夜—マラソンコンサート

2026年5月29日(金) 18:30

ナディア・ブーランジェ: 3つの小品    
ショスタコーヴィチ:  
ブロークの詩による7つのロマンス Op.127      
コダーイ: ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲 Op.7    
ドヴォルジャーク:  
ピアノ三重奏曲第4番 小短調 Op.90 《ドゥムキー》      
ギデオン・クライン: 弦楽三重奏曲     
バルトーク: ピアノ五重奏曲 へ長調 Sz23        
※休憩2回、22:00終演予定  
7,500円 / U-25 3,500円 全席指定

特別協賛: 株式会社 安藤・間  
協賛: artience株式会社 / TOPPAN株式会社 /  
TOPPAN クロレ株式会社



## Trio Wanderer

さすらいの探求者がたどり着く「フランスの精髓」  
——トリオ・ヴァンダラーの帰還 小川敦生

パリ国立高等音楽院に出自を持つトリオ・ヴァンダラーがフランスのピアノ三重奏曲ばかり3曲を一夜で演奏すると聞いた途端に、筆者はワクワク感が止まらなくなった。20年近く前に録音で出会い、何か月も何年も、毎日聞きたくなるほど魅了された経験があったからだ。

彼らについては、まず団体名を紐解いておく必要があるだろう。「ヴァンダラー」は「さすらい人」を意味するドイツ語だ。シューベルトの歌曲から取ったという。理想の土地を求めてさすらい一人の人間の思いを表したこの曲は、数あるシューベルトの歌曲の中でも実に変化に富んだ名曲だ。トリオ・ヴァンダラーもまたさまざまな土地をさすらい、理想の音楽世界にたどり着くべく探究を続けていることは間違いないだろう。

結成は1987年。現在のメンバーで30年以上の歩みをともにしてきた彼らのアンサンブルには、「阿吽の呼吸」はもとより、有機的な一体感でも言ったほうがいいものが宿っているように感じられる。もはや一つの生命体なのではないか。そんな思いが湧き出してくるのだ。

彼らの演奏に接したときにまず驚かされるのは、その「空気を含ませ方」の絶妙さである。筆者が初めてトリオ・ヴァンダラーを聞いたのは、ラヴェルのピアノ三重奏曲の録音だった。今回の来日でも演奏されるこの曲はフランス近代音楽の至宝の一つであり、ラヴェルがピアノ三重奏にはどんな広がりか期待できるかという可能性を切り開いた作品だ。同時に、奏者には極限の技巧を強いる難曲でもある。しかし、彼らの奏でる音からは、技術的な峻厳さではなく、ある時には瞑想を感じさせるような精神性が、ある時には驚くほど軽やかで自由な「浮遊感」が立ち上ってくる。

3人が紡ぎ出す旋律は、重力から解き放たれたかのように空間をたゆたい、互いに対立することはなく、実に美しい色彩のグラデーションを描き出す。そこには、一音一音に込められた柔らかさと流麗さがあり、聴き手はその心地よさの極致に身を委ねることになる。これこそが、彼らの真骨頂である。精緻な構成力を持ちながら、決して機械的にならず、音楽の背後に絵画における余白のようなものを感じさせる。その空気感こそが、ラヴェルの音楽が持つ神秘的な美しさを最大限に引き出しているのだ。

このたび、TOPPANホールで開催される彼らの演奏会が、ドビュッシー、ラヴェル、そしてショーソンという、フランス音楽の精髓を巡るプログラムであることを、心からうれしく思う。

ドビュッシーのピアノ三重奏曲は、作曲家がまだ18歳の時に書かれた「若書き」の作品だ。印象主義的と言われる作風に到達する前の、瑞々しく清々しい情感にあふれたこの曲を、40年近くの歳月をかけて熟成に向かっているトリオ・ヴァンダラーがどう描き出すのか。若き日の天才が抱いた憧憬を、彼らは透明感を持ちながらも暖かみある音色で、鮮やかに現代に蘇らせてくれるに違いない。

そして、ラヴェルの金字塔を経て、プログラムの掉尾を飾るのがショーソンのピアノ三重奏曲である。筆者にとってショーソンのこの曲の真価を教えてくれたのは、まさにラヴェルのピアノ三重奏曲とカップリングされていたトリオ・ヴァンダラーの録音だった。この曲が持つ、胸を締め付けるような切なさには、いつも心をどっぷりと浸らせてしまいたくなる。彼らの演奏は、時にすさまじい流れの中に魂をただよわせ、喜びの旋律においてはこの上ないウキウキ感をもたらす。一度耳にすれば、毎日でもその音の世界に出かけたいような、抗いがたい魅力に満ちている。彼らのおかげで、筆者はこの曲を何十回聞いたかわからない。TOPPANホールの空気は、この決して有名とは言えない佳曲を通して、彼らの美音をどう響かせてくれるのだろうか。

ドイツ的な「ヴァンダラー」という名を持ちながら、フランス人としてフランス音楽の神髄に迫ろうとする彼らのあり方には、一見するとミスマッチのような面白さがある。しかし、演奏を聞いていると、実はその底流に深い必然性があることに気づく。シューベルトやベートーヴェンをも得意とする彼らがフランス音楽において比類なき説得力を持つのは、おそらく単なる感性や雰囲気だけで演奏しているからではない。ドイツ音楽の探求で培った構築力があるからこそ、フランス音楽特有の繊細な色彩や弱音の美しさが、確かな骨格を持って立ち現れるのではないだろうか。

今回のフランス音楽プログラムが彼らにとっての「本領発揮」の舞台であることは疑いようがない。しかしそれは、単なる故郷への帰還ではないはずだ。30年以上の歳月をかけて、古今の傑作を「さすらい」歩んできた彼らが長い旅の末に行き着いた境地をフランス音楽に還流させるという、意義深い一夜になるだろう。

シューベルトが描いた「さすらい人」は、理想を追い求め、常に「ここではないどこか」を探す存在だった。トリオ・ヴァンダラーもまた、フランスという自らのルーツから音楽の旅に出てドイツ古典派やロマン派を徹底的に研究し、その論理性をも自らの血肉としてきた。そんな彼らが向かっている世界を自らの目と耳で確かめることができるのは、幸せ以外の何物でもない。

（おがわ・あつお／多摩美術大学教授、ジャーナリスト）

## トリオ・ヴァンダラー

2026年6月10日(水) 19:00

ジャン＝マルク・フィリップ＝ヴァルジャベディアン(ヴァイオリン) /  
ラファエル・ビドゥ(チェロ) / ヴァンサン・コック(ピアノ)

ドビュッシー: ピアノ三重奏曲 卜長調  
ラヴェル: ピアノ三重奏曲 イ短調  
ショーソン: ピアノ三重奏曲 卜短調 Op.3

7,000円 / U-25 3,500円 全席指定

特別協賛: 株式会社 竹中工務店

**SCHEDULE**

2026.5 ~ 8

主催公演

TOPPANホールチケットセンター 03-5840-2222  
(10:00 ~ 18:00 土日祝休)

日時	公演
12 (火) 19:00	レオンコロ弦楽四重奏団 特別協賛：清水建設株式会社
5 / 26 (火) 19:00	ニコラ・アルトシュテット(チェロ) プロジェクト 第1夜 - Duo ヨナス・アホネン(ピアノ)
29 (金) 18:30	第2夜 - マラソンコンサート イリア・グリーンゴルツ(ヴァイオリン) / 原 麻理子(ヴィオラ) / アンナ・レナ・エルバルト(ソプラノ) / ヨナス・アホネン(ピアノ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
6 / 10 (水) 19:00	トリオ・ヴァンダラー 特別協賛：株式会社 竹中工務店
7 / 6 (月) 19:00	(ハーゲン プロジェクト フィナーレ)
7 (火) 19:00	ハーゲン・カルテット

日時	公演
7 / 23 (木) 19:00	本堂竣哉(ピアノ) × ベーゼンドルファー Model 250 (ランチタイムコンサート) TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]
7 / 27 (月) 12:15	Vol.140 近衛剛大(ヴィオラ)
8 / 8 (土) 12:15	Vol.141 稲積陽菜(ピアノ)

※開場は開演の30分前となります。  
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。  
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2026年4月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

**INFORMATION**

**2026/2027 主催公演ラインナップ 発表!**



2026年	公演	発売日
10/1 (木) 19:00	TOPPANホール26周年 2026/27シーズン オープニングコンサート ウィリアム・ヨン(ピアノ) / 毛利文香(ヴァイオリン) / 笹沼 樹(チェロ)	6/24 発売
10/5 (月) 19:00	ルノー・カブソン(ヴァイオリン) & ギヨーム・ペロン(ピアノ) ブラームス ヴァイオリン・ソナタ全曲	7/22 発売
10/26 (月) 19:00	パトリツィア・コパチンスカヤ(ヴァイオリン) & ソル・ガベッタ(チェロ)	7/22 発売
11/16 (月) 18:30	Glocal Piano Festival at TOPPANホール 第66回 プゾー二国際ピアノコンクール 予選会	発売日未定
11/17 (火) 18:30	共催：フェルッチョ・プゾー二・グスタフ・マーラー財団 ★	発売日未定
12/8 (火) 19:00	フォーレ四重奏団	9/2 発売
12/9 (水) 19:00	★	9/2 発売
2027年	公演	発売日
1/8 (金) 19:00	TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2027 中野りな(ヴァイオリン) / 谷 昂登、北村明日人(ピアノ) ほか	9/16 発売
1/18 (月) 19:00	上野通明(チェロ) & レミ・ジュニエ(ピアノ)	9/16 発売
1/20 (水) 19:00	イアン・ボストリッジ(テノール) & ジュリアス・ドレイク(ピアノ)	9/30 発売
1/22 (金) 19:00	★	9/30 発売
3/18 (木) 19:00	ピーター・ウィスベルウエイ(チェロ) & 北村朋幹(ピアノ)	10/28 発売
5/15 (土) 18:00	笹沼 樹(チェロ) & 兼重稔宏(ピアノ) ベートーヴェン チェロ・ソナタ全曲	10/28 発売
6/21 (月) 19:00	キリル・ゲルシュタイン(ピアノ)	10/28 発売
7/7 (水) 19:00	ベルチャ・カルテット	発売日未定
7/8 (木) 19:00	ベートーヴェン 弦楽四重奏曲全曲	発売日未定
7/10 (土) 18:00		発売日未定
7/11 (日) 18:00		発売日未定
7/13 (火) 19:00		発売日未定
7/14 (水) 19:00		発売日未定
8/10 (火) 19:00	カルテット・インテグラ III	発売日未定

※発売日は変更になる可能性があります。記載の発売日は単券の一般発売日です。  
※★印はセット券をご用意しています。  
※各公演の詳細はオフィシャルWEBサイトでご確認ください。



**若き異才が孤高に描く、ゴルトベルクの宇宙—**

24年4月のTOPPANホールクラブ特別企画と25年6月の(ランチタイムコンサート)で、圧倒的な集中力と文学的な表現で聴衆を魅了した本堂竣哉。今春の芸大卒業を機に、リサイタル開催が決定しました。本堂が5歳から魅了され、ライフワークとして取り組んでいるJ.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」を、1909年製ベーゼンドルファー Model 250で披露します。第23回東京音楽コンクール優勝の俊英の飛躍に、ご期待ください!

本堂竣哉(ピアノ) ×  
ベーゼンドルファー Model 250  
2026年7月23日(木) 19:00  
J.S.バッハ:ゴルトベルク変奏曲 BWV988  
5,000円 / U-25 2,500円 全席指定  
発売日:5月13日(水) [会員:5月9日(土)]

**精鋭ヴィオリストが挑む  
渾身の直球勝負!**



自然体でありながら豊かな音楽性に満ち、清潔感のある柔らかな音色が魅力の気鋭ヴィオリスト、近衛剛大が「ランチタイムコンサート」に登場します。ベルリン・フィル楽団員の養成を目的としたカラヤン・アカデミーに2024年から在籍し、ベルリン・フィルの舞台でもたびたび活躍中の近衛は、TOPPANホールゆかりのヴィオリスト、ニルス・メンケマイヤーにも師事するなど、ここ数年で数多くの刺激を受けながら着実に経験を積み、音楽家として成長しています。そんな近衛の「いま」を、この目で、この耳で確かめられる絶好のコンサートです。

熟考の末選ばれたプログラムは、無伴奏2曲の真っ向勝負。言わずと知れた名曲、J.S.バッハの《シャコンヌ》と、技巧が要求されるヒンデミットの無伴奏ソナタを、どのように描き分けるのか、期待が高まります。神秘的で魅惑的な響きを持つヴィオラという楽器の魅力、近衛の卓越した表現力で存分に味わい尽くす、聴き逃せないコンサートになるでしょう。

〈ランチタイムコンサート Vol.140〉

近衛剛大(ヴィオラ)

2026年7月27日(月) 12:15

J.S.バッハ:《シャコンヌ》

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ  
第2番 二短調 BWV1004より

ヒンデミット:無伴奏ヴィオラ・ソナタ Op.11-5

1,500円 全席指定

発売日:5月28日(木) [会員:5月21日(木)]

【TOPPANホールクラブ】

無料(ゴールド会員2枚/レギュラー会員1枚)

※電話・窓口にてお申し込みください。

**ベーゼンドルファーが紡ぐ、ソナタの深奥**



久元祐子が2023年から取り組んでいる、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会。vol.4となる今回、初めてTOPPANホールでの開催となります。久元といえば、作品、作曲家、そしてそれを取り巻く時代と、多面的かつ深く向き合うその真摯なアプローチが高い評価を得てきた実力派。歴史的な楽器での演奏会・録音も多く、作品が生まれた時代へと誘う知的なピアノは、聴く者に新たな気づきを与えてくれることでも知られています。使用する楽器は、ベーゼンドルファー・アーティストでもある久元が「ベートーヴェンの時代の息遣いと繊細さを残しながら、現代の音楽シーンにあっても埋もれないパワーをも併せ持つウィーンの名器」と語る、ベーゼンドルファー280VC ピラミッド・マホガニー。名手と名器が織りなす響きをじっくりとご堪能ください。

久元祐子(ピアノ)

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ全曲演奏会 vol.4

2026年5月16日(土) 15:00

ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ

第6番 へ長調 Op.10-2 / 第15番 二長調 Op.28 (田園) /

第9番 ホ長調 Op.14-1 / 第17番 二短調 Op.31-2 (テンペスト)

全席自由:4,000円(当日4,500円) / 学生 2,000円

主催・お問い合わせ:プロアルテムジケ 03-3943-6677

チケットのお申し込み:TOPPANホールチケットセンター

**表紙:ニコラ・アルトシュテット**

全曲をスコルダトゥーラ(変則調弦)で演奏する離れ技に驚嘆し、その異次元のテクニックと音楽のダイナミクスに熱狂した初登場公演より。静かに魂を燃やし、音楽と対峙する姿をおさめた一枚を。待望の再登場となる5月、こだわりのプログラムでアルトシュテットの無敵のオリジナリティをたっぷりとお楽しみいただく2日間。お聴き逃しなく。

**編集後記**

あつという間に桜の季節も終わりを迎え、新緑が美しい時期になりました。そして気づけば大型連休もすぐそこです。ひとつのイベントが終われば次のイベントへ。こうしてまた一年が過ぎていくのだなあと、まだ半年も経っていないのについ嘆息してしまいます(笑)。

今号は公演迫るニコラ・アルトシュテットに、共演者や第2夜のコンセプト等について、インタビューしました。とても真摯で丁寧な回答が届いて、紙幅をオーバーしてしまったので、完全版をWEBサイトにアップします。どうぞ楽しみにお待ちください。(雪)